

## つくば市桜地区における乳幼児健診と母親への育児指導

筑波大学心理学系 丹羽 洋子

つくば市役所健康増進課 西原 貞子

The health examination for infants and the advice for mother's child rearing behavior at Sakura area of Tsukuba City

Yoko Niwa (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305, Japan*) and Teiko Nisihara (*Tsukuba City Healthcare Center, Tsukuba 305, Japan*)

Key words: mother's rearing behaviors, health examination for 1.6 years infants, environment, mother's stress

In study 1 some types of developmentally retarded children were screened in the health examination for 1.6 years infants. It was found that appearance of the retardation of speech development has been influenced by their home environment and their mother's infants rearing behavior. The purpose of study 2 was to examine the effect of the home environment (mother's age, sex, birth-order, number of family, dwelling years, house form) on mother's infants rearing behavior at Sakura area. Twenty-five items were prepared according to the mother's behavior toward child-rearing, and they were administered to 255 mothers of normal children aged 1.6 through 3 years. Based upon results of factor analysis, a scale was constructed with six factors: mother's rearing, eating behavior, indulgence, basic habit of life, attachment, and parent attitude. Significant birth-order differences in mother's rearing behavior were found: The second children were seen more difficult than the first children in eating behaviors and attachment, etc. Theoretical implications of these results were considered in terms of "Mother's Stress" within mother-infant interactions.

1歳6カ月健診の目的は、心身障害、疾病の早期発見、虫歯予防、基本的な生活習慣の自立など、乳幼児の健康増進をはかることと同時に、親に対する育児指導にある。筆者ら健診にかかわるものにとって、健診が単なる疾病の発見だけにとどまらず、母親と子どものかかえている悩みや不安にたいして、いかに総合的な援助をなすのかといった点が、最大の課題であることを痛感している。そのためには、健診内容の充実をはかるとともに、受診者たちが子育てをしていく上でかかえる問題について、的確に把握する必要があると思われる。

しかし、このような母子保健事業を考えると、地域の実態をぬきにして考えることはできない。経

済的・物理的・精神的な援助を考えたとき、母と子を取りまく生活環境との関連で考えていくことが必要になる。

われわれが健診に関わっている、つくば市は、昭和62年に5町村が合併してつくられた新しい市である。それぞれの町村がかかえる問題を持ち寄っての合併であったために、住民のサービス・事業の一本化など、今なお難問が解決されずに山積みしている。特に5町村の中でも、研究学園都市の発足にむけて、研究機関の移動がピークだった昭和50年頃より、桜地区の人口の増加がめだつ。昭和48年当時10,371人であったものが、昭和62年には、41,793人となり、急激な上昇を示している。出生数の推移についても、

昭和48年164人であったものが、昭和62年には690人となり(国の出生率11.4, 茨城県の出生率11.9, 桜地区の出生率17.3)急激な増加を示している。また、年齢各歳別人口をみてみると、0歳から39歳の年齢が全人口の72%を占めており、若い年齢層の比重が大きかった、桜地区の特殊性がうかがえる。

したがって、桜地区における母子事業を進展させるために、この地区に特徴的な環境が、子どもの発達と母親の育児に及ぼす影響について検討することを、本研究の目的とする。そこから得られた知見によって、桜地区の特性を生かした健診のありかたや母親への援助の仕方を考える手がかりが得られるものと思われる。母親の養育態度に影響すると考えられる、桜地区の特性としては、以下のようなものが挙げられよう。

### I. 核家族化

研究機関の移動により、桜地区は急激な核家族化が進んだ。そのために、母親から保健センターへの電話による相談が増えたが、内容は身近に相談できる人がいれば解決できるようなことが多い。なんとなく不安だから、確認したい等の相談がほとんどである。しかし中には、育児について、深刻に悩み相談されるケースもある。

### II. 母親母集団の異質性

研究所の移転に伴って、転入してきた母親の中には、それまでの地元の母親と比べて、高学歴の母親が多い。一度にこれらの母親が転入してきたため、桜地区の母親には、育児知識が豊富で、子育てにも熱心な人が多い。桜地区の各公民館では、子育て講座が開かれており、積極的に学習しようとする母親達のグループが生まれている。また、子どもへの期待も高いようである。それを裏づける実態として、近所の子どもの比較、育児書どおりでないことへの不安や確認の相談が保健センターには多く持ち込まれる。全般的に、子どもの発達を急ぐ傾向が感じられる。

### III. 集合住宅・高層住宅が多い

他の4町村と比べて、特に桜地区は新しく建設された集合住宅や高層住宅が多いが目立つ。そのために、子どもたちは、外に出て思いきり遊ぶことが少なく、体のエネルギーを十分に使っていないのではないかと考えられる。

そこで、本研究においては、まず研究Ⅰにおいて、このような桜地区における乳幼児健診の結果を、他の町村と比較することにより桜地区の特徴を見出すことを目的とする。

## 研究 1

### <方法>

**被健児** つくば市の5町村において、平成3年度の1歳6カ月健診の受診対象児は、平成2年度1月から8月に出生した幼児であり、その内訳は表1に示した通りである。中でも、桜地区の受診率は91.6%と最も高く、子どもの発達についての関心の高さがうかがえる。

表1 つくば市の5町村における健診受診者数

	対象児童数	受診者数	受診率
谷田部	643	513	79.8
桜	563	516	91.6
大穂	171	122	71.3
豊里	141	113	80.1
筑波	197	170	86.3
計	1715	1434	83.1

### 手続き ①1歳6カ月健診における発達診断

つくば市では、満1歳6カ月の幼児全員を対象に、保健センターにおいて、毎月1回1歳6カ月健診が行われている。図1ではその流れと事後処理について示したものである。

問診においては、表2のような問診項目によって、行動面や生活面、精神面での遅れがないかがチェックされる。項目5については、絵本以外でも指さし行動があれば(+)に判定される。また項目6については、3個以上の単語があれば(+)と判定され、それ以下の場合には経過観察児としてフォローされ、必要によって発達相談にむけられる。

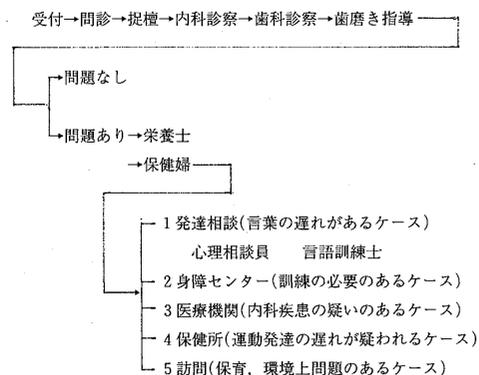


図1 1歳6カ月健診におけるスクリーニングとフォローアップの流れ

<結果と考察>

1歳6カ月健診の結果、精神発達面においてチェックされた子どもは、表3に示したとおりである。桜地区では、要観察が28名と他の地区と比べて最も多くなっている。ついで多いのは桜地区と隣接した谷田部地区の23名であり、その他の周辺地区との違いが見いだされる。この結果からも、桜地区がつくば市のなかでも特殊な地区であることがわかる。

そこで次に、これらの要経過観察とされた28名について、その後の発達の様相あるいは遅滞の程度について、経過観察過程にそってまとめたものが表4である。「所見」の欄では、健診の結果チェックされた原因について、その後の発達過程を見極めながら、「養育」あるいは「遅れ」の2種類に分類した。「養育」とは、子ども自身には特に問題は見あたらず、むしろ親の育児行動や養育環境面で問題があったと

表2 スクリーニングとしての問診チェック項目

ころばないで上手に歩ける 開始(カ月)	+	-
2手を軽くもつと階段があがれる	+	-
3積み木を2つか3つ積み上げる	+	-
4おもちゃ(自動車, 人形)で遊ぶ	+	-
5絵本を見て知っているものを指さす	+	-
6パパ, ママなどの意味のある単語がいえる ( ) ( ) ( ) ( ) ( )	+	-
7おとなの簡単な命令がわかる	+	-
8後ろから呼んだとき振り向く	+	-
9目のことで心配がない	+	-
10他の子どもにも興味をもち一緒に行動する	+	-
11予防接種		
12昼間の保育者 ( )		

表3 1歳6カ月健診におけるスクリーニング結果

	受信者数	精神発達面					その他要指導			
		要指導	要観察	要精密	要治療	治療中	小計	指しやぶり	小計	
桜	516	0	28	0	0	0	28	13	64	85
谷田部	513	1	23	0	0	0	24	5	48	53
大穂	171	0	1	0	0	0	1	5	4	9
豊里	141	0	9	0	0	0	9	11	12	23
筑波	197	0	7	1	0	2	10	14	19	33
計	1715	1	72	1	0	2	72	48	147	211

表4 1歳6カ月健診の経過観察児

ケースNo	経過観察過程	経過観察結果	所見
2	2歳前に単語(+)	問題なし	養育
5	2歳前に単語(+)	問題なし	養育
7	2歳前に単語(+)	問題なし	養育
9	2歳前に単語(+)	問題なし	養育
11	2歳前に単語(+)	問題なし	養育
15	2歳前に単語(+)	問題なし	養育
18	2歳前に単語(+)	問題なし	養育
19	2歳前に単語(+)	問題なし	養育
21	2歳前に単語(+)	問題なし	養育
22	2歳前に単語(+)	問題なし	養育
24	2歳前に単語(+)	問題なし	養育
26	2歳前に単語(+)	問題なし	養育
14	2歳前に単語(+)	3歳時で2語文(-)発達相談へ	遅れ
13	2歳3カ月健診で2語文(+)	問題なし	養育
17	2歳3カ月健診で2語文(+)	問題なし	養育
4	2歳3カ月健診で2語文(-)	2歳5カ月で2語文(+)	養育
8	2歳3カ月健診で単語10ヶ	発達相談へ	遅れ
12	2歳3カ月健診で2語文(-)	発達相談へ	遅れ
20	2歳3カ月健診で2語文(-)	現在 経過観察中	
6	2歳3カ月健診で2語文(-)	現在 経過観察中	
25	2歳3カ月健診でチェック	現在 経過観察中	
3	発達相談 2歳3カ月でチェック	現在 経過観察中	
1	発達相談 2歳3カ月でチェック	現在 経過観察中	
10	独歩2~3歩のため	保健所の発達相談へ	遅れ
16	移転	不明	
27	移転	不明	
23	連絡とれず	不明	
28	連絡とれず	不明	

考えられるケースを指す。また、「遅れ」とは、言語理解や発語面での遅滞、あるいは多動などの行動面での問題があるものを意味している。

これによると、28名中、2歳前に単語が出てくることによって、問題なしとされた子どもが12名、やや遅れて2歳3カ月健診時に2語文が可能になったことにより、問題なしとされた子どもが2名であり、併せて14名である。スクリーニングされた子どものちょうど半数を占める。育児上の親の対応や子どもの養育環境に問題があって、1歳6カ月時までの正常な発達やや阻害されたケースであると考えられる。これらは健診時の育児指導によって、その後正常な発達をとげるに至っている。これらのケースの親には、妊娠時の母親教室や、4カ月健診および育児相談時に、育児について適切な指導をすることの必要性が求められている。また、1歳6カ月健診時での親に対する的確な育児指導をいかにすべきかも今後の重要な課題であると考えられる。したがって、これらに対応するために、親が育児上どのようなことに困難を感じており、どのような指導を必要としているかについて把握することを研究Ⅱの目的とする。

さらに表3には、精神発達面以外での「その他要指導」とされたケースのうち、特に桜地区に特徴があると思われたものを示してある。これによると、歯列咬合の異常な子どもが64名(12%)と目立って多い。また指しゃぶりの原因については一律には決めたいが、親の愛情不足や何らかのストレスによるケースが多い。これらはいずれも、体を使って外で元気よく遊ぶことが少ないためではないかと推測される。前述した通り、桜地区は集合住宅・高層住宅が多いため、他の周辺地区の子どもと比べると、自宅で手軽に体を動かせる場所の確保が困難であると考えられる。このような環境的要因によって、健診の結果問題があるとされる子どもが見いだされると考えられるため、次の研究Ⅱでは育児に対する親の意識に影響する、集合住宅・高層住宅の効果についても併せて、検討する事とする。

## 研究Ⅱ

研究Ⅰにおいて、1歳6カ月健診で要観察とされる子どものうち、約半数は何らかの育児上の原因によるものであることが明らかにされた。またこの他に集合住宅・高層住宅といった桜地区に特徴的であると考えられる要因に基づく、要観察の問題も見いだされることが示された。したがって今後健診その他において、的確な育児指導を進めていくために、

本研究においては、桜地区における母親が、子どもの育児に対してどのような点で不安を感じているのか、育児上で難しいと感じているのはどのようなことかについて明らかにすることを目的とする。これによって、桜地区の特性を生かした健診のありかたについても考えることが可能になるものと思われる。

### <方法>

**被験者** 桜地区の乳幼児健診を受診した母親 255名

**実施期間** 平成3年8月から12月

**手続き** ①育児上の問題点についての質問紙 過去の研究(河野ら 1985, 田中ら 1980)や筆者たちのこれまでの健診での経験にもとづいて、「母親が子育てをしていく上で不安に感じたり、どうしてよいかわからないこと」についての25項目(具体的な項目内容については表5参照)によって作成された。回答形式は、それぞれの項目について、「とても難しい(1点)」から、「とてもかんたん(4点)」までの4件法でなされた。

②育児行動に影響すると考えられる状況要因に関する質問 1. 母親の年齢 2. 子どもの性別 3. 何番目の子どもか 4. 同居人の人数(両親以外の大人) 5. 桜地区に移り住んでからの年数 6. 住宅環境(集合住宅・高層住宅 または 一戸建て)について質問された。このうち4番は、桜地区の特徴として最初に挙げられた、Ⅰ核家族化に対応しており、5番は、Ⅱ母親母集団の異質性に対応しており、6番は、Ⅲ集合住宅・高層住宅が多い、に対応しており、これらの特性が育児に与える効果について分析を試みたものである。

③親のしつけ態度についての質問 1. 母親の自信—「母親はしつけについて自信があるほうか」について「とても自信がある(4点)」から「全然自信がない(1点)」までの4件法。2. 父親の関与—「父親は子どもと遊ぶほうか」について「よく遊ぶ(4点)」から「全然遊ばない(1点)」までの4件法。3. 母親の期待—「母親は子どもに対して期待をもっているか」について「もっている(4点)」から「特にもっていない(1点)」までの4件法。4. 母親のしつけ—「他の母親と比べてしつけはどうか」について「きびしいほう(4点)」から「のんきなほう(1点)」までの4件法。以上のような質問紙が、乳幼児健診の会場で配布され、その場で記入させることによって回収された。

表5 「育児上の問題点」についての因子分析結果

項目	I	II	III	IV	V	VI	h <sup>2</sup>
体罰の与え方	.82						.56
しつけの厳しさ	.66						.38
食事の時の作法	.57						.10
叱り方	.54						.51
家族の育児感の違い	.45						.38
離乳時期・離乳方法		.77					.43
断乳		.65					.22
授乳の仕方		.62					.43
食事の量		.41					.51
偏食			.56				.34
兄弟間のしつと			.50				.46
絵本おもちゃの与え方			.49				.42
かんしゃく起こした時			.47				.42
夜泣き			.44				.40
おむつのはずし方				.93			.47
大小便の自律				.73			.92
着脱衣の自律				.34			.34
歯磨き				.33			.49
言葉のこと					.65		.45
指しゃぶり・爪かみ					.61		.74
ほめ方					.42		.43
父親の協力を得る						.60	.63
親どうしのつきあい						.41	.12
他人の子とのけんか						.37	.36
因子負荷量の2乗和 (寄与率%)	2.52 (10.1)	2.30 (9.2)	2.19 (8.7)	1.96 (7.8)	1.62 (6.5)	1.04 (4.2)	11.63 (46.52)

(注)因子負荷量は .30以上を記載した

## &lt;結果と考察&gt;

## A. 育児上の問題点についての分析

母親が育児上、感じている問題点について明らかにするために、回答された25項目を対象として因子分析がなされた。その結果、第6固有値と第7固有値の間に、大きなギャップが見いだされたために、固有値が1以上の6因子を抽出し、バリマックス回転を行った。回転後の因子パターンが、表5に示されている。

第1因子には「育児に対する考え方」「叱り方」「食事作法」「体罰」「しつけの厳しさ」などの項目が負荷しているため、これらはいわゆる『しつけ』因子と命名された。第2因子には、「食事の量」「授乳」「断乳」「離乳方法」などすべて、栄養指導に関する項目が負荷しており、『食事』因子と命名された。第3因子は、「かんしゃく」「夜泣き」「しつと」「絵本の与えかた」「偏食」などからなっており、いずれも親の過保護の態度あるいは甘やかしのしつけがうかがえるものである。したがって、『甘え』因子と名づけられた。第4因子は、「排泄」「歯磨き」「おむつ」「着脱衣」など、『基本的生活習慣』因子と命名された。第5因子は、「指しゃぶり」「言葉の

おくれ」「ほめ方」など、親子の『愛着』因子と名付けられた。第6因子は、「親どうしの付き合い」「父親の協力」「他人の子とのけんか」など、親自身の態度が問われる項目であるため、『親の態度』因子と命名された。以上6因子すべて命名が可能であり、いずれの項目も1つの因子に高く負荷していたため、『しつけ』『食事』『甘え』『基本的生活習慣』『愛着』『親の態度』これら6因子によって、「育児上の問題点」測定尺度とされた。

## B. 「育児上の問題点」と育児に影響する状況要因との関係

1. 母親の年齢 2. 子どもの性別 3. 何番目の子どもか 4. 同居人の人数 5. (桜地区に)移り住んでからの年数 6. 住宅環境、の順にそれぞれの要因が「育児上の問題点」とどのようにかかわっているかについて、分析された。

## 1. 母親の年齢

対象とされた母親の年齢の平均は、31.14歳(SD = 5.75)であった。したがって、平均より1SD以下すなわち25歳以下を1群、26歳から30歳までを2群、平均より1SD以上、すなわち31歳から35歳までを

3群, 36歳以上を4群として, 母親の年齢を4群に分け, 「育児上の問題点」とされる6つの問題点それぞれについて1要因の分散分析が行われた。その結果, いずれの問題点についても, 母親の年齢の主効果は見いだされなかった。これは, 予想外の結果であったが, 一般的に考えられるような, 若い母親ほど育児にたいする不安が高いといったような事実は, 桜地区に関してはあてはまらないことがわかる。この地区では, 公民館の子育て講座が積極的に開かれていることなどからもわかるように, 若い母親であっても育児に対する知識が豊富であることが推測される。

## 2. 子どもの性別

乳幼児健診を受診した子どもの性別によって, 6つの「育児上の問題点」それぞれの評定値について差がみられるかどうかについて, t検定を行ったところ, いずれの問題点についても有意な性差は見いだされなかった。かつては, 男の子らしいしつけ, 女の子らしいしつけをするために, 親は苦心したものと思われるが, ここでは男の子も女の子も育児上では何等親の感じる違いは存在していない。これは世のなかの傾向として, 男女の差が縮まってきたことを反映するものであるのか, あるいは特に桜地区のみにおける, 高学歴の母親の育児に対する考え方を反映したものであるかと思われる。今後さらに周辺地区との違いについて検討する必要があることが示唆された。

## 3. 何番目の子どもか

調査対象とされた子どもが何番目の子どもであるかについて, 第1子と第2子以下の2群に分けて, 「育児上の問題点」についての評定値それぞれに対して, t検定を行った。その結果は表6に示されている。

「しつけ」と「基本的習慣」を除いて, いずれの観点にも出生順位による有意差が見いだされた。特に「甘え( $t_{(253)}=5.79, P<.001$ )」と「愛着( $t_{(252)}=3.40, P<.001$ )」については, 0.1%水準で出生順位による差が見いだされ, 最初の子どもの方が有意にこれらに関するしつけが容易であることがわかる。「甘え」「愛着」の中には「兄弟間のしつと」「指しゃぶり」「ほめ方」などの項目が含まれており, いずれも母親の適切な愛情を必要とする育児行動と考えられるが, 親の愛情を独占できる1人っこに比べて, 2人きょうだいなになると, 親のほうも愛情の与え方について, 難しさを感じていることが推測される。また「食事( $t_{(252)}=1.80, P<.1$ )」「親の態度( $t_{(251)}=1.35, P<.1$ )」についても, 同様に1人っこのほうが容易であると感じている傾向があり, こ

表6 出生順位による育児上の問題点の違い

問題点	第1子	第2子以下	t値	有意水準
しつけ	2.41	2.31	1.05	n.s.
食事	3.18	2.94	1.80	$p<.1$ +
甘え	3.45	2.67	5.79	$p<.001***$
基本的習慣	2.51	2.55	-0.45	n.s.
愛着	3.35	2.86	3.40	$P<.001***$
親の態度	2.70	2.56	1.35	$P<.1$ +

$p<.001***$   $p<.1+$

れは子どもが2人以上になることで, 子育て全体が忙しくなり, 母親としての対応の難しさが反映されているものと考えられる。この点に関しても, 一般的には2番め以降の子どもの方が, 母親自身子育ての経験があるため, 最初の子どもより余裕を持って育児できるのではないかと考えられがちであるが, 実際には反対であることが見いだされる。最初の子どもの方が余裕をもって, 育児に関わっているようであり, 2番目以降になるほど, 育児の忙しさ・困難さを感じながら子どもと向き合っているのが現実であるようである。育児指導においては, この点への配慮と理解が必要であると思われる。

## 4. 同居人の人数

核家族化に伴う同居人の人数の違いによる, 育児への影響を明らかにするために, 同居人を人数によって0人(いない), 1人, 2人, 3人以上の4群に分け, これらの中で差が見られるかどうか6つの問題点それぞれについて, 1要因の分散分析を行った。その結果は, 表7に示されている。

「親の態度」については1%水準で同居人の数の主効果( $F_{(3,243)}=3.77, P<.01$ )が見られたため, 多重比較によって下位検定を行ったところ, 5%水準で「2人」と「3人以上」の間に, また「2人」と「いない」の間に有意差が見出された。同居人が2人の場合, 最も「親の態度」が容易であると認知されているが, この場合はおそらく父親あるいは母親の両親(祖父母)と同居しているケースが最も多いであろう。一方, 「3人以上」の場合と「同居人がいない」場合が, 最も難しいと認知されている。前者は大人が多すぎることによってかえって難しくなり, 後者はいわゆる核家族のために両親の育児についての考え方の統一が難しくなるものと推測される。

「しつけ( $F_{(3,250)}=2.23, P<.1$ )」「食事( $F_{(3,252)}=1.60, P<.1$ )」「基本的習慣( $F_{(3,250)}=2.26, P<.1$ )」「愛着( $F_{(3,253)}=2.13, P<.1$ )」については, いずれも10%水準で有意な傾向が見出された。多重比較の結果, 「しつけ」については「2人」と「3

表7 同居の人数による育児上の問題点の違い

問題点	いない	1人	2人	3人以上	F値	有意水準
しつけ	2.35	2.43	2.71	2.05	2.23	p<.1+
食事	3.05	2.90	3.65	2.90	1.90	p<.1+
甘え	3.13	2.70	3.20	3.10	0.96	n.s.
基本的習慣	2.53	2.51	2.83	2.27	2.26	p<.1+
愛着	3.17	2.90	3.47	2.63	2.13	p<.1+
親の態度	2.57	2.87	3.21	2.52	3.77	p<.01**

p&lt;.01\*\* p&lt;.1+

人以上」の間に、「食事」については「2人」と「3人以上」の間と、「2人」と「1人」の間にそれぞれ5%水準で有意差が見出された。同様に「基本的習慣」については、「2人」と「3人以上」の間に、そして「愛着」に関しては、「2人」と「3人」、「いない」と「3人以上」の間にそれぞれ5%水準で有意な差が見られた。したがっていずれについても、「親の態度」と同様に、同居人が「2人」の場合、おそらく祖父母と同居している場合がもっとも育児が容易であると認知しているようである。一方いずれについても一貫して父母以外の大人が「3人以上」の場合もっとも育児が難しいと感じていることがわかる。「食事」に関しては、「1人」の場合すなわち、年寄りが1人の場合しつけが最も難しいようである。

以上のことから、いずれのしつけについても2人すなわち祖父母が同居しているばあいが最も安定して育児に関わっていられることがわかる。核家族化が進んでいる桜地区の育児指導においては、今後留意しなければならない点であろう。

#### 5. 移り住んでからの年数

桜地区に移り住んでからの年数について、2年未満を1群、2年から4年未満を2群、4年以上8年未満を3群、8年以上を4群としてわけ、もともと地元に住んでいた母親と、移転にともなって最近転入してきた母親では、育児に対する意識が異なるかどうかについて分析された。その結果は表8に示されている。

「しつけ」「基本的習慣」を除いて、「甘え(F<sub>(3,251)</sub>=4.12, p<.01)」については1%水準で、「食事(F<sub>(3,250)</sub>=2.54, p<.05)」については5%水準で、移り住んだ年数の主効果が見出された。多重比較の結果、「食事」については「4~8年」と「8年以上」の間に、また「甘え」については「4~8年」と「8年以上」の間と「4~8」と「2年未満」の間に、5%水準で有意差が見出された。いずれも4年から8年前に転入した母親が最も食事の与え方や親の養育やしつけ方が難しいと感じており、反対に8年以上地元に住んでいる親はこれらが容易であると感じ

表8 移り住んだ年数による育児上の問題点の違い

問題点	2年未満	2~4年	4~8年	8年以上	F値	有意水準
しつけ	2.43	2.31	2.25	2.49	1.19	n.s.
食事	2.89	3.16	2.85	3.29	2.55	p<.05*
甘え	3.50	3.14	2.74	3.16	4.12	p<.01**
基本的習慣	2.71	2.56	2.43	2.47	1.21	n.s.
愛着	3.26	3.21	2.80	3.27	2.46	p<.1+
親の態度	2.82	2.60	2.48	2.72	1.61	p<.1+

p&lt;.01\*\* p&lt;.05\* p&lt;.1+

ている。また、「愛着(F<sub>(3,250)</sub>=2.21, p<.1)」「親の態度(F<sub>(3,249)</sub>=1.61, p<.1)」についても住居年数の主効果が見られる傾向にあった。下位検定の結果、「愛着」に関しては「4~8年」と「8年以上」の間、「4~8年」と「2年未満」、「4~8年」と「2~4年」の間に5%水準で有意差が見られた。「親の態度」については、「4~8年」と「2年未満」の間に差が見られた。これらはいずれも「4~8年」の親が愛着や親の態度のついて難しいと感じており、反対に「8年以上」か「2年未満」の親の方が簡単とのべていることがわかる。

以上から、移住年数によって育児行動に困難さを感じる程度は明らかに異なっていることが見出された。特に一貫して「4~8年」の母親がいずれについても難しいと認知していることが見出され、むしろここ1~2年に移りすんだ親とは、対象的である。これは「4~8年」前とえばちょうど、万博の跡地に、民間の研究機関が移って、急速に周辺部にアパート等が多く建ち始めてきたころである。したがって、当時転入した家族は核家族が多いと考えられ、家庭内で相談できる人もなく、育児に困難を感じていることが推測できる。この結果には、つくば市の他の地区と比べて、新しく急速な転入を強いられた家族が多い桜地区の特徴が現れているものと思われる。母子保健事業の点からみても、なんらかの形で援助の対象とすべき点であるといえよう。

#### 6. 住宅環境

まず最初に、集合住宅・高層住宅に住んでいるかあるいは一戸建てに住んでいるかといった住宅環境と、移り住んだ年数との関係について見てみたものが表9である。これをみると一戸建てに住んでいるのは、「8年以上」前から桜地区に住んでいるといった地元の親であろうと考えられる。その他8年未満になるといずれも半数以上が集合住宅であり、これらの割合は、集合住宅143人(55.9%)、一戸建て108人(42.2%)と、集合住宅のほうが優勢であることがわかる。このことから桜地区は、集合住宅を中心とした新しくつくられた町であることがわかるであろう。

表9 住宅環境と移り住んだ年数との関係

人数	2年未満	2~4年	4~8年	8年以上	合計人数
集合住宅	31	51	48	15	145(57.9%)
一戸建て	11	31	19	50	111(42.1%)

次に、集合住宅あるいは一戸建てかのちがいに  
よって、母親の育児意識に差が見られるかどうかを  
明らかにするために、6つの問題点それぞれについ  
てt検定を行った。その結果、「食事」のみに5%  
水準で有意差が見出され( $t_{(249)} = -2.85, P < .05$ ),  
集合住宅(M=3.00)に住む母親より、一戸建て(M  
=3.28)に住む母親のほうが食事に関するしつけが  
容易であると認知していることが明らかにされた。  
これは食事に関するしつけは、項目を見てもわかる  
とおり、「授乳の仕方、断乳、離乳時期、食事の量」  
など、一般的な育児に関する知識を必要とする内容  
から成り立っている。したがって、これまでの結果  
と考え合わせると、集合住宅に住む比較的新しく転  
入してきた親子には核家族が多いと考えられ、この  
場合は育児書や雑誌によってこれらの知識をえるも  
のと思われる。しかし比較的以前から住んでいた地  
元の親子の場合は、祖父母と同居しているケースが  
多く、したがって育児の経験者としての祖父母の存  
在の有無が、特に食事のしつけに関して影響してい

るものと考えられよう。

C. 親のしつけ態度と育児に影響する状況要因との  
関係

1 母親の自信、2 父親の関与、3 母親の期待、4  
母親のしつけのきびしさ、それぞれについて状況  
要因との関係で1 要因の分散分析(住宅環境につい  
てはt検定)を行ったものが、表10である。これに  
よると、「母親の自信」は、住宅環境について5%  
水準で有意差がみられ( $t_{(244)} = 2.20, P < .05$ ), 一  
戸建てのほうが(M=2.36)が集合住宅(M=2.20)より  
自信をもって育児にかかわっていることがわかる。  
やはりこれは新しく転入してきたものと、地元  
に住んでいた人の違いであろうかと思われる。

次に「父親の関与」について見てみると、出生順  
位の主効果( $F_{(3,240)} = 4.39, P < .01$ )が見られてい  
る。下位検定の結果、「1人目」と「3人目」め、「2  
人目」と「3人目」の間に有意差が見られ、最初の  
第1子はよく遊ぶが第2子、第3子と段々子どもに  
関与がうすれていくことがわかる。「住宅環境」に  
ついて有意差が見られ、集合住宅(M=3.38)の  
ほうが、一戸建て(M=2.21)より父親がよく関与  
していることがわかる。この点に関しては、新しく  
移転してきた父親の方が育児に対する関心は高いこ  
とがうかがえる。

表10 親のしつけ態度と状況要因との関係

	母親の自身	父親の関与	母親の期待	母親の厳しさ
母の年齢				
25未満			2.69	
26~30			2.50 P<.01	
31~35			2.80 **	
36以上			2.75	
出生順位				
1		3.42		
2		3.27 P<.001		
3		2.88 ***		
4		2.75		
同居人数				
0				2.53
1				2.95 P<.1
2				2.37 +
3				2.56
居住年数				
2 未満			2.88	
2~3			2.76 P<.1	
4~8			2.55 +	
8 以上			2.70	
住宅環境				
集合	2.20 P<.05	3.38 p<.05		
一戸	2.36 *	2.21 *		

p<.001\*\*\* p<.01\*\* p<.05\* p<.1+

「母親の期待」については、1%水準で「母親の年齢」の主効果( $F_{(3,247)}=2.47, P<.1$ )のある傾向が見られ、下位検定の結果「31~35」と「25未満」の間と、「31~35」と「26~35」の間に有意な差が見られた。したがって母親の育児に対する自信は「31から35」がピークであるといえる。反対に20代の母親は自信が低いようである。また、「居住年数」の主効果も見られる傾向にあり( $F_{(3,247)}=1.88, P<.1$ )、下位検定の結果「4から8」と「2未満」の間に有意差が見られ、前述した仮説通り新しく転入してきた母親ほど期待が高いことがわかる。この点に関しては、健診における育児指導においても、高くなりつつある母親の期待を考慮した上で、現実の子育てに向いあえるよう援助していくことが必要であると思われる。

最後に「母親のしつけの厳しさ」については、「同居人数」の主効果( $F_{(3,54)}=2.32, P<.1$ )のある傾向が見られた。検定の結果、「0人」と「1人」、「1人」と「2人」の間に差が見られ、同居している大人が夫婦以外に1人である場合がもっともしつけが厳しくなっていることが見いだされた。また反対に、核家族である場合と、祖父母と同居しているばあいはしつけが甘くなっている。これは、核家族のしつけの甘さは、子育ての対応がわからないことが大きな原因であると思われる。また、祖父母と同居の場合には、家庭内の育児に対する考え方の不一致が、結果的に母親自身の甘い対応になっているものと考えられる。一方、祖父母のうち片方のみが同居している場合は、しつけがもっとも厳しくなっているといった現状は注目するに値する。母親自身の訴えからも裏づけられるとおり、片親の場合は母親自身が育児について、祖父母とやり合う場合が多いようである。育児の経験者として、頼れる対象であるにもかかわらず、少しの意見の食い違いによって母親が悩んでいるケースがあるようである。母親にとって問題が生じやすい家族構成であると考えられ、育児指導において配慮が必要となろう。

#### <全体的考察>

研究Ⅰにおいては、つくば市の他の地区と比べて、特に桜地区は乳幼児健診で、精神面での要観察としてチェックされる子どもが多いことが明らかにされた。その原因としては、母親の対応あるいは育児状況などが考えられ、桜地区特有の環境的要因によって、一時的に発達が遅らされているものと考えられる。したがって、研究Ⅱの結果から見出された、桜地区といった地域に住む母親の育児に対する不安や困難さの認知にもとづいて、これからの母子保健事

業にたいして、以下のような示唆が見出されるであろう。

まず、育児に関しての問題点のうち、「夜泣き、しつと、偏食」といった子どもの「甘え」にたいする対処を除いては、同居人(すなわち祖父母)の存在によって、育児の難しさが軽減されることが明らかにされた。また新しく転入してきた集合住宅の母親より、地元の一戸建てに住んでいる母親のほうが、育児にたいする自信も高く、安定して子育てに取り組んでいることがみいだされた。とするならば、核家族化が進む桜地区においては、祖父母にかわる対象をどこにもとめるかが今後の課題として挙げられよう。前述したように、保健センターに子育ての不安を訴えたり、確認を求めるといった現状以外にも、祖父母にかわって気軽に相談できる、子育ての仲間づくりが、その解決策の1つとして考えられる。保健センターでの母親学級や公民館等での子育て教室は、今後母親の仲間づくりの場としていく必要があるであろう。

次に、祖父母が同居しているケースであっても、片親の場合(同居人が1人)、母親の子育てはかなり厳しいものとなっていることに注意する必要がある。祖父と祖母の両方がそろっている場合は、「親どうしのつきあい」や「食事の与え方」などかれらの経験に頼って、最も安定して育児を行っているにも関わらず、片親になると急に不安が高まるのは、最近の母親自身の協調性のなさに帰するものではないかと推測される。自分と意見や対応の異なる祖父母との間で、子どもを取りあひしたり、おじいちゃんやおばあちゃんへの反動として必要以上に母親のしつけが厳しくなったりする現状が見受けられる。これは、たとえば、若い母親が育児の仕方がわからずに、あるいは一日中子どもと向き合っていることによって、「育児ノイローゼ」といった症状が生じることがあるが、それとは明らかに異なっているようだ。桜地区の母親は、育児に対する知識も十分あり子どもへの期待も高いが、自分と考え方の異なる祖父母にたいして不安や葛藤を感じていると考えられ、いわゆる「母親ストレス」といった状態にあると考えられよう。これはある意味では、母親が自己の育児信念や期待を持っているほど、それだけよけいにストレスは高くなると予想される。したがって、このような母親ストレスを解消するためには、育児に対する指導を行うよりも、母親を受容するといったカウンセラー的な相談活動が、今後ますます必要となってくるものと思われる。育児にたいする知識を、自ら雑誌や本で勉強している高学歴の母親には、こういった現状の理解者、共感者もあ

とも現状の解決には効果的であると思われる。

### 要 約

研究1は、1歳6か月健診でスクリーニングされた子どもについて、検討したものである。その結果、発語の遅れは、家庭環境や母親の育児行動によって影響されていることが見いだされた。そこで、研究2においては、桜地区における環境的要因(母親の年齢・子どもの性別・出生順位・同居の人数・居住年数・住宅形態)が母親の育児行動に及ぼす影響について検討することを目的とした。育児にかんする25項目が選ばれ、255名の1歳6か月から3歳の子どもを持つ母親に質問として実施された。その結果に対して因子分析を行ったところ、次のような6因子が母親が感じている育児上の問題点として見いだされた。しつけ・食事・甘え・基本的な生活習慣・愛着・親の態度である。また、母親の育児行動に及ぼす出生順位の効果が見いだされた。すなわち、第2子は、最初の子どもに比べて食事・愛着その他で、対応の困難さが感じられることが見いだされた。これらの結果に基づき、子育てにおける「母親ストレス」の観点から考察がなされた。

### 文 献

- Baldwin, A.L. 1945 Pattern of parent behavior. *Psychological monograph* 58(3).
- Baldwin, A.L. 1949 Effects of home environment on nursery school behavior *Child Development* 20(2), 49-136.
- Baumrind, D. 1971 Current patterns of parental authority *Developmental Psychology Monograph* 4(1), 1-46.
- △ 河野洋二郎(他) 1985 1歳半児の母親の育児に関する意識調査 *精神衛生研究* 31 51-58.
- 中条淑子・西原貞子・長谷川敏子 1990 赤ちゃん育児レッスン 創元社
- 丹羽洋子(印刷中) 乳幼児をもつ「母親のストレス」に関する予備的研究 筑波大学発達臨床心理学研究 4.
- 佐藤真子 1990 2才児・自立期の育て方としつけ主婦の友社
- 田丸敏高 1981 乳幼児健診と発達遅滞児の診断 *東京大学教育学部紀要* 21 193-200.

—1992.9.30受稿—